

幸松地区

八坂・香取・稻荷合社【八丁目】

ご祭神は

経津主命 ふつぬしのみこと

素盞鳴命 すさのうのみこと

豊受姫命 とようけひめのみこと

由緒・沿革

鎮座年月日は不詳。書き残せる棟札箱表面の記載文によると、『永録元年十一月秀宥なる者の勧請による』と記されている。

神社が保存している棟札には、『奉造立香取大明神・八幡大菩薩精舎一字、元禄十五年

九月』と記されたものがある。これは、その頃社殿の改築が行なわれたものと思考される。

「享保十九年三月二十七日」に、神部領より『正一位香取大明神』の称号を賜られた際の宣旨並びに当時之が奉告祭を齋行した際、奏上した祝詞文も、当神社に保存されている。

寛政七年五月、「稻荷神社」を勧請して、「香取大明神」と合祀したと記されている文書も保存されている。

明治十四年建立の協進講石碑には、『武蔵国北葛飾郡八丁目村に鎮まりいます「香取大明神」は、いつの頃か有りけん下総の本宮より、『みたま』を移しまつりしを永禄年間【一、五五八〜六九】、居城を関宿に据え此のあたり迄領したる足利晴氏朝臣、御社を再建せられしとぞ云々』と刻まれていることから、恐らく、永禄年間に勧請されたものと思考される。

明治六年『村社』に列格。昭和二十四年「宗教法人」に登録。

『新編武蔵風土記稿』には、「香取社」小名五丁目の鎮守なり、粕壁宿最勝院の持ち、棟札あり、中央に永禄十卯年十二月とあり、年号の両辺に寄進人の姓名等記せしと見ゆれど文字剥落して唯、香取・八幡両社のよしかすかに見ゆ、今は全く香取のみを祀れりと記されている。また、香取社境内にて社頭は自ら一廓をなせる、「香取社」あり、小名本村及び新田の鎮守なり、末社「稻荷」・「天王」と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、香取社「村社」村の南方にあり、経津主命を祀る。祭日三月七日。一つは香取社「平社」村の北方にあり、経津主命を祀る。祭日九月十九日と記されている。

神社行事

毎年七月七日・十二日・十三日・十四日・十五日の祇園祭と春祭・秋祭が行なわれる。

鷺神社 『百余尊権現社』【小淵】

ご祭神は

くにとこたちのみこと
国常立尊

由緒・沿革

鎮座年月日は不詳。不二山浄春院所蔵の文書、「鎮守百余尊縁起」によると、境内地に接した小高い土地にあり、本郷と小淵の界にある社である。『縁起』の内容は次のとおりである。

「天平勝宝【七四九〜七五七】の頃、武州比企郡に未翁【ひつじおきな】という者がいた。毎日未の刻に皇都へ出勤したが、時刻をたがえることがなかつたので、堂上を許され、未翁と言われて尊敬されていた。その頃当地は利根川のほとりで、大淵があつたので、巨淵と言われていた。この淵は龍の都に通じると言われ、未翁はこの淵を通つて龍の都へ行き、宝珠を受け万民を救いたいと願い、この淵からたびたび龍宮へ通

った。

ある日、淵の底に光明の輝きを見た翁は、不思議に思い、その根元を尋ね求めているところ、夢中に龍人が現われて告げた。「われ、なんじを待つこと久し、万民を救いたくばこの経文を万人に授くべし。」と。お告げがあると夢はさめた。ところが、手の中には経文が有った。その経文には、「人、貧弱して多くの病苦を受け、愚かとなりて、善悪を理解せざらんも、この経文をそらんじ、わが名を唱えなば、願いは必ずかなうであろう。」とあった。しかし、村のならわしは、神をあがめる風習なので、御神体が必要ならば人は信心を起すまいと思ひ、しるしとして、御姿を現わしたまえと祈ると、たちまち天地は鳴動して闇となり、神の姿が現われ、空中から声があった。『天照大神十二の撰社ほか百二十余社は皆この大悲尊の分身なり、信ずべし敬うべし。』と、お告げが終わると神の姿は淵に消えた。未翁は大願成就と大いに喜んでこれを祭り、百余尊権現と唱えた。村人は、この不思議な話を伝え聞いて、神々を勧請し、村の鎮守と

あがめ、社を建立して宮本院と号した。その後、旱魃にも淵の水は満ち、田を助けたと言う。

一方、未翁は、信州の本田光浄という者に後事を頼むと、比企の岩殿山に登って、観音像を彫り、この山に安置してから、石をわかつてその身を隠した。その後多くの星霜を経て淵も埋まり社も傾いたが、文明三年【一、四七一】本田四良三良正浄は本姓を隠して宮本院の弟子となり修験道を相続し、社を再建した。そして、昔の記録を集めて記しこれを後世の手本に備えた。」と記されている。

『新編武蔵風土記稿』には、村の鎮守なり、祭神詳ならず、別当宮本院、本山修験、村内不動院配下、信濃国本田善光の後裔本田光浄開基し、其後文明三年本田四郎三郎正浄と云者、祖先の先蹤【せんしょう】をしたひて住職となり、再建せし由、縁起に載せたり、按に本田善光がこと、もとより慥ならざることとは世の知る處なれど、今姑縁起の儘を記す。

○山王社・天王社・神明社以上三社宮本院持ち、また、八幡社・天神社・愛宕社・山王社・稻荷社不動院持ち、浅間社浄春院持ち、と記されているが、明治初期の廃仏毀釈により、各社も所在不明となった。

『武蔵国郡村誌』には、鷲神社「村社」村の西北隅にあり、国常立尊を祀る。祭日六月二十五日・神明社「平社」村の中央にあり、大日靈尊を祀る。祭日九月二十一日・大杉社「平社」神明境内にあり、高雷神を祀る。祭日三月二十七日と記されている。

しかし、鷲神社以外の社は現在所在不明である。

神社行事

不詳

伝統行事

不詳

◎付記 この神社は、杉戸町大字本郷との境界線上にあり、社殿の中は、中央で仕切りがされ、小淵と本郷の鎮守が祀られている。

下谷神社【不動院野】

ご祭神は

経津主神ふつぬしのかみ

由緒・沿革

鎮座年月日は不詳。神社の裏手にこの神社の由来が刻まれた石碑が有る。それによると、明治四十四年十一月、勅令により不動院野村の各字にあった「香取社」七社を合祀して、この地【天神社境内地】に奉祀したと記されている。しかし、住民は、後々の災いを恐れて、跡地に末社として「香取社」の小祠を祀り現在に至っている。

下谷とは、不動院野の昔からの集落名で【小淵から見て低い土地：谷地の意】通称不動院野を下谷と称している。

『新編武蔵風土記稿』には、「香取社」七社、一つは村の鎮守なり、大乘院持ち、余六社は村民持ち、と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、「天神社」村社、村の中央にあり、菅原道真を祀る。祭日二月・九月二十五日・「香取社」平社、村の西方にあり、「香取社」平社、村の北方にあり、「香取社」平社、村の南方にあり、「香取社」平社、村の南方にあり、「香取社」平社、村の南方にあり、「香取社」平社、村の東方にあり、「香取社」平社、東方にあり、「香取社」平社、村の東北にあり、と記されている。

神社行事

不詳

伝統行事

不詳

◎付記 下谷の地名について、著者は、昭和五十六年、NHK埼玉FM放送で、東京と春

日部付近の地名と題してお話をした。【詳細については略。】

また、東京の下谷神社も、この地の神社と同様に、明治四十四年勅令によって、地域の稲荷神社を合祀したものであると伝えられている。【ただし、東京はこの地域を下谷稲荷町と呼称されていた。今は住居表示によりその地名は残されていない。】

大杉神社【不動院野】

ご祭神は

やまとおおものぬしくしみかたまのみこと

倭大物主櫛甕玉命

由緒・沿革

鎮座年月日は不詳。口碑によると、大杉神社略縁起には、下総国一ノ宮香取社が東葛飾郡内に分社された時代、天下泰平・国家安泰・諸厄諸難解除及び家内安全等の神として奉祀されたと伝えられている。当初は、大杉大明神と称し明治以後大杉神社と改めた。

この大杉神社は不動院野村にあった大乘院【明治初期の廃仏毀釈令によって廃寺となった。】の境内に祀られていた。その由緒としては、天喜五年【一、〇五七】源氏が奥州征伐【前九年の役】の時、当地で暴風雨に逢い、賊の来襲を受け、部下数百を失った。

その中に兵糧方の大将、大野垂併が戦死したので、その供養の為、大乘院を建立されたと伝えられている。この大乘院住職で玄中という僧がおり、法力強く博学の僧であつ

た。

この僧は神仏混合の時流を悟り、常陸国稲敷郡阿波村の今宮大明神【通称安姿様】を境内に祀り、宗派の興隆を計画したと伝えられている。

『新編武蔵風土記稿』には、この神社の記載はない。

『武蔵国郡村誌』には、この神社の記載はない。

神社行事

夏祭六月二十六・七日・秋祭十月二十六・七日。当日は安姿囃子【あんばばやし】が奉納されていた。

伝統行事

この神社の祭礼に奉納されている神楽がある。『不動院野神楽囃子』と言って春日部市の指定無形文化財になっている。この神楽は、常陸国鹿島郡阿波村【茨城県稲敷郡桜川村阿波】に伝わるもので、当地に伝来された時期は不明であるが、現在保存会が所蔵し

ている道具入れの箱に『武蔵国葛飾郡幸手領不動院野邑東組中・嘉永六年九月八日造之』と記されている。この神楽は、以前は「太鼓連中」と称した神楽であった。「太鼓連中」とは、不動院野村の東組の者で組織されていた。この神楽囃子は、一名アンバ囃子と称され、大杉神社のご祭神を俗に安姿天狗の神、船靈様【ふなだまさま】とも言われているところから、安姿【アンバ】囃子の語源となったと伝えられている。

戦前から終戦直後の頃まで、農閑期になると、早朝と、夕方から夜にかけて地域の人達が練習していたので、遠く粕壁町の町並みまで「囃子」の音が聞こえていた。一時期は、神田祭や地方の祭及び粕壁町の天王祭に出向いて「囃子」を演奏していた。昭和四十五年「不動院芸能保存会」が結成されて、後継者の育成に努めている。最近では子供達に伝承をと考えて練習・育成に努力している。

白山神社【樋堀】

ご祭神は

伊奘諾尊いざなみのみこと

由緒・沿革

鎮座年月日は不詳。縁起等もない。

『新編武蔵風土記稿』には、村の鎮守なり、正福寺持ちとのみ記されている。正福寺は、明治初期の廃仏毀釈令により【無住のため】廃寺となったため、文書も散逸して不明。現在は樋堀大師堂となっている。

『武蔵国郡村誌』には、「白山社」平社、村の西方にあり、伊奘諾尊を祀る。祭日二月六日・七月六日と記されている。

神社行事

例祭 四月六日

伝統行事

不詳

天神神社【榎籠】

ご祭神は

菅原道真
すがはらのみちざね

伊奘諾尊
いざなみのみこと

保食命
ほじきのみこと

由緒・沿革

鎮座年月日は不詳なれど、古き棟札に『延宝三乙卯年三月二十六日、奉立天満宮大自

在天神新社一字』としるされたものがある。故にこの頃、勧請されたものと推定される。尚この他に、『元禄十四年三月奉造立天満大自在天神精舎一字』と記された棟札がある。おそらく延宝三年に建立された社殿が何等かの事故で大破したので、再建された時に作成されたものと推定される。

明治六年「村社」に列格。昭和二十四年「宗教法人」登録。

『新編武蔵風土記稿』には、天神社、村の鎮守なり、村持ちと記されている。末社に稲荷・大杉大明神とある。その他に、村内に「白山社」・「稲荷社」共に村持ちと記されているが、所在不明。

『武蔵国郡村誌』には、天神社、「村社」村の中央にあり、菅原道真を祀る。祭日二月二十五日・白山社、村の西方にあり、伊奘諾尊を祀る。祭日三月六日・稲荷社、村の北方にあり、保食命を祀る。祭日三月初午・九月十五日と記されている。

◎註 「白山社」・「稲荷社」は明治時代に、天神神社に合祀されたものと思考される。

神社行事

例祭三月十五日

伝統行事

不詳

女體神社【牛島】

ご祭神は

奥津日子命
おうつひこのみこと

奥津姫命
おうつひめのみこと

由緒・沿革

鎮座年月日は不詳。縁起等もない。

『新編武蔵風土記稿』には、女體社、村の鎮守なり、蓮花院持ちとのみ記されている。蓮花院とは、明治初期の廃仏毀釈令によつて廃寺【隱居寺で無住のため】とされたので、文書等が散逸してしまい縁起・由緒等一切不明。蓮花院とは、牛島の藤花園である。『武蔵国郡村誌』には、女體社、「村社」で村の西方にあり、息長足姫を祀る。祭日二月十五日と記されている。この他に、「天神社」平社で、村の南方にあり、菅原道真を祀る。「稻荷社」平社で村の東方にあり、倉稻魂命を祀る。「荒神社」平社で、村の東方にあり、と記されているが、現在はその所在は不明である。

神社行事

春祭一月十九日・例祭七月十五日・秋祭十一月二十六日

伝統行事

不詳

末社として「稻荷社」・「日枝社」がある。

香取神社【新川】

ご祭神は

経津主神
ふつぬしのかみ

大山咋命
おおやまさのみこと

倉稻魂命
うがのみたまのみこと

由緒・沿革

鎮座年月日は不詳。由緒縁起等も不詳。

『新編武蔵風土記稿』には、香取山王合社、村の鎮守なり、無量院持ちと記されている。
『武蔵国郡村誌』には、「香取社」村社で、村の中央にあり、経津主命を祀る。祭日一月七日と記され、「稻荷社」平社で、村に合祀すと記されている。

神社行事

春祭三月二十八日・秋祭十一月二十八日

伝統行事

不詳